



教師を目指す学生による「学生文化」「学校文化」の創造と
新たな「学生と学校のWin-Winの関係」の構築

東浦町SP通信

～東浦町では、学生ボランティアを「職員の仲間」という思いを込めて、
「SP」または「スクールパートナー」と呼んでいます。～

第12号

2026年8月25日

編集 緒方 なな
東浦町教育委員会
SPコーディネーター

わく算5日目

わく算5日目です。今日から3日間は、午後の部でわくわく数学教室（中学生）も同時開催です。連日子どもたちがとても楽しそうに過ごし、良い顔で帰っていく様子が見られます。90分間、子どもたちが“楽しく”勉強できるのはすごいことです。私自身2人の子どもを育てる母ですが、家ではなかなか集中して90分間も勉強できませんから……。学校で、友達と、SPさんと、一緒に勉強できる環境が保護者からするととても有難いです。（保護者アンケートにも続々と同様のご意見が届いています！）

中学生も1対2～3の指導ができました。これが叶ったのは、多くのSPさんが参加してくれたおかげです。東浦中学校の校長先生が様子を見に来られた際に、「これだけ丁寧に中学生も見てもらえるなんて、有り難いです。」とお話ししてくださいました。中学生は、集中して取り組んでいる様子でした。それをSPさんは温かく見守ってくれます。待ってくれます。見守ること、待つことも立派な支援です。あるSPさんは、「今、何を考えているのか？ どうしたいのか？ 何とか汲み取りたいと思い、じーっと子どもたちの顔を見ていたからか、なんだか目が疲れました(笑)」と話していました。“視る”ことの重要性は、中村コーディネーターも今日お話してくださいました。裏面にまとめますので、ぜひ読んでください。現場で大切になることが詰まっていますよ！



算数教室が始まる前から、多くのSPさんが子どもと積極的に関係作りを始めます。「安全・安心」な環境づくりの大切さをどのSPさんも肌で感じているのではないかと思います。



「ここに来たら、自分を見てもらえる。話を聞いてもらえる。」多くの子どもたちがSPさんとの会話も楽しみに来ています。2人の大人（先生）にこんな風に話を聞いてもらえたら……嬉しいに決まっています。



教具で、タブレットで、実物で、指で……。いろいろな手立てで子どもたちの「分かった」を引き出そうとしてくれます。

片葩小のSPコーディネーター中村浩二先生は、“授業アドバイザー”も兼任されています。町内にとどまらず、他の地域の学校にも出向き、授業を見て現場の先生方にアドバイスをされています。その数、なんと年間100本以上とのこと！そんな方から、学生のうちに直接お話を聞ける機会はそうそうありません。今は「難しいな」「ちょっと分からないな」と思うこともあるかもしれませんが、現場に出た時にふと思い出し、見返してもらえたらと思います。現場に出てからの方が感じ得られることも増えるかもしれません。

今日は、2回も座席表を作り替えました。みなさんきっと「なんでこんな面倒なことをするの？」「ここまでやる必要があるの？」と思ったかもしれません。ここ（わく算）でも、ほとんどの子は多少変更があってもスッと座席に座れます。でも、自分がどこに座るか分かっていないと座れない子達もいるのです。では、そういう子たちをどうするか？全体の指導が入らない子には、別の指導をしていかなければならないのです。そういった配慮が、これからの学校現場では必要になります。（現状の学校現場では、そういった配慮がまだ十分にできていないように感じます。）

この、「全体の指導が入らない子をどうするか？」それを考えて手立てを打つことが、個別化・個性化教育の根本です。個別化・個性化教育の“カタチ”に乗せて、何となく授業をすれば良いのではなく、**どれだけ子どもたちを視るか**、なのです。クラス全体に話して伝わらない子たちにどういった配慮をするか、そういった配慮ができるかどうかで、学級経営も授業も変わっていきます。

年間100本ほどの授業を見て、現場の先生方に声をかけて10年経ちますが、この10年で一番言っているのは「子どもを視る」ということです。授業計画をどれだけ立てようが、目の前の子どもたちがその計画通りにできるとは限りません。そして、計画通りにできない子たちがいた時に、「何であなたはできないの？」という教師がいるのも事実です。でもそれは、できないようにしている教師の責任です。「Aくんが話を聞いてくれません。何回言っても聞いてくれません。」と言う先生もいますが、何回も同じように言っているからダメなのです。

みなさんがこれから現場に出た時には、**授業計画をしっかりと立てること以上に子どもを視ることを大切にしてください**。いくら綿密に立てた授業の計画でも、目の前の子どもたちの反応を視て、計画を変えていかなければいけません。その“子どもを視る”ということを、ここ（わく算）ではみなさんよくやってくれています。だからこそ、子どもたちが「楽しい」と感じられる算数教室になっているのですが、みなさんにとっても“視る”ことの良い練習になっていると思います。残り3日間もぜひいろいろ試してみてくださいね。

